

公益社団法人
日本演劇興行協会

会報 No.69
2025 WINTER



公益社団法人
日本演劇興行協会

会報 No. 69
2025 WINTER



シアタークリエ



博多座



新橋演舞場



大阪松竹座



御国座



南座



歌舞伎座



新歌舞伎座



明治座

目次

理事インタビュー……………2

第九回脚本募集 受賞者……………7

二〇二四年度 海外研修報告……………11

日本演劇興行協会 理事インタビュー

株式会社博多座 代表取締役社長 大坪 潔 晴



夢中になったブルース・リー

——子供時代のこと、演劇の原体験についてお聞きできますでしょうか。

私は一九五三年(昭和二八年)に生まれ、中学一年生まで長崎で育ちました。当時の地方都市もそうだったのではないと思いますが、演劇に触れる機会はほとんどありませんでした。子供時代はテレビの創世記で「月光仮面」を見ていた記憶があります。それからウォルト・ディズニーの番組とプロレスを隔週でやる番組枠があって、毎週楽しみに放送を待っていました。小学校低学年の頃に学芸会で昔話の「大きなかぶ」でおじいさん役をやって、皆から「上手だったよ」と言われて気持ちよくなったことは覚えています(笑)。

また、私には歳の若い独身の叔父がいたので時々映画に連れて行ってくれて、「ゴジラ」と加山雄三さんの「若大将」シリーズは、毎年新作と一緒に見に行っていましたね。洋画を初めて見たのは

高校に入ってからで、オリヴィア・ハッセルがジュリエットを演じた「ロミオとジュリエット」(一九六八年)を見にいきました。普段は怖くて偏屈な先生が授業ですごく良かったと褒めていて、そのことに驚いて興味を持ったんです。初めて洋画に接してその素晴らしさに感動しました。同年公開の「猿の惑星」も見に行き、猿のキャラクター表現が見事で驚きました。

また、私の学生時代はブルース・リーの全盛期でもあって、「燃えよドラゴン」(一九七三年)にはまりましたね。近所に道場があったのがきっかけで高校生の頃から少林寺拳法を習っていたこともあり、ブルース・リーにはすごく憧れました。香港や中国に行つて武道を習得したいと思うくらいでした(笑)。でも、単に強くなりたかったから少

林寺拳法をしていたのではなく、根底には仏教の教えがあつて身体と心を同時に高めていくところに惹かれました。体の鍛錬のみならず勉強にもなるという思いで、大学時代まで続けていました。

また、私が入学した熊本大学のある市内には大衆演劇の劇場があり、何度か足を運んだことがあります。これが生の舞台に触れた最初だと思えます。九州地方で活躍していた、ばつてん荒川さんの劇団がよく公演していたのを覚えていますね。なんでも笑い飛ばして皆で楽しむ、そんな公演でした。

様々な出会いが視野を広げる

——大学卒業後は九州電力に入社され長く勤められます。ご自身が影響を受けた出会いや出来事などを聞かせいただけますか。

一九七六年に九州電力に入社しまして、最初の三年間は営業所に配属されてお客様対応の仕事をしました。一年間は窓口業務、二年目は電気料金を滞納されているお客様から料金を回収する係。三年目には企業の対応をして収入を確定させたり、集金人として働いている方たちの労務管理などを担当しました。当時は発電、送電、配電、そしてお客様対応まで一貫体制で事業をやっていましたので、まず現場体験をすることが通例となっていました。

その後、本社勤務になるのですが、全く違う仕

事を担当することになります。発電所や送電線などの設備形成にあたっては色々なご意見をお持ちの方がいらつしやって、特にその頃は環境意識が盛り上がりを見せ、原子力発電所の是非についても議論が活発な時期でした。九州電力管内でも行政訴訟や民事訴訟がいくつかけ提起されていて、その訴訟の担当を三年ほど務めました。ちょうどその頃、各電力会社が基金を拠出してエネルギーに関する法律の勉強をするための研究所を新たに設立することになり、一九八二年東京に「日本エネルギー法研究所」が設立されました。東京大学の行政法や環境法の先生を中心とした研究所なのですが、そこへ各電力会社から研究員を出すことになったんです。当時、担当していた裁判でお世話になった弁護士の方が推薦してくださって、私も出向することになりました。私はそれまで一度も九州を出て生活したことがなかったのですが、初めて東京で仕事をして、そこで出会った先生方や各界で活躍する経験豊富な方々にお会いできたことは、私の視野を劇的に広げてくれました。このレベルまでいかないと公益事業の仕事はできないのだという思いを新たにしましたし、推薦してくださった弁護士の先生そして送り出してくれた会社・上司には本当に感謝しています。

研究所で三年間働いた後、今度は海外勤務をすることになりました。海外電力調査会という組織の、パリにある欧州事務所で三年間勤務する機会をいただいたんです。当時は今のようにネット環

境も発達していませんでしたから、日本にいたら断片的な情報でしか接することのできなかった欧州主要国の電力会社の情報をダイレクトに知ることができ、電力業界で働く上で本当にいい経験になりました。東京、そして海外での経験は、仕事の質を上げる視点を植え付けてくれたと思っています。



ステークホルダー目線の経営を

——九州電力時代に培われた仕事への向き合い方は、その後社長に就任された警備会社のにしけい、そして博多座での現在のお仕事にも影響しているのでしょうか。

それはとても大きいですね。九州電力は大企業で地域経済を引っ張っていくリーダーカンパニーであり、地域に於いて諸々の役割を背負っている



す。一方で公益事業は皆様方のご理解がなければ進められません。そういったパブリックアクセプタンスを得るための努力・手間暇は当然のこととしてやってまいりました。そして、それは従業員に対する配慮においても同じことなんです。会社の施策を社員一丸となって進めるためには、地元の理解を得るのと同じく、会社方針に対する理解を従業員にも求めなければなりません。そのためには多くの手順を踏み、手間暇をかけて社内コンセンサス作りをします。そうしないと多くの従業員のベクトルが一緒になりませんし、会社としての総合力や推進力が発揮できないためです。対外的にも対内的にもしっかりと物事を進めていくということが当たり前のこととして身についていました。今風に言うと、それは、ステークホルダー目線の経営ということになります。

その後、警備会社の仕事に携わるようになって感じたのは、そういった視点が当たり前のこととしては定着していないということです。中小企業は経済の状況や政治の動向に左右されることも多く、日々の経営をどうするかにフォーカスせざるを得ないところもあります。そういった時に、ステークホルダーの中でどうしても後回しにされるのは従業員なんです。中小企業こそ人財を会社の経営資源として大事にしなければならぬのですが、うまくまわっていないところがありました。様々な取り組みの結果、今では良い方向に向かっていていると思います。



博多座はさらに小規模で、社員六〇名、パート従業員を入れても百名弱の小さな世帯です。一人欠けるだけでも仕事に支障が出てしまうような、小さな会社であればあるほど人は大切な経営資源です。人ざいのざいは材料の「材」ではなく、財宝の財、「人財」だということが人事ではよく言われます。そういった目線が取りも直さず会社の大きな力となる源泉なので、やはり人を大切にすること、そしてステークホルダーの目

線というのはどの組織においても欠かすことはできません。自社、他社含めて批判されるような事象が起きた時の原因というのは、自社のことだけを考え、お客様をはじめとする他のステークホルダーのことを考えていなかったからというのがほとんどです。そういうところにつきり目を向けて考え、業務を進めていく習慣を身に付けていたきたいと、にしいでも博多座に来てからも従業員の皆さんにはよくお話をしています。

博多座の果たす役割とは

——劇場という独特の空間に身を置かれる日々はこれまでとは違った刺激があるのではないかと思います。

着任して一年になりますが、長く公益事業で仕事をしてきた人間としては、エンターテインメント業界というのは全く違う世界だということをまず感じました。歌舞伎、ミュージカルをはじめ博多座には一流の方々にお越しいただいていますが、舞台に携わる方々と接して思うのは、役者さんのみならず裏方さんも含め皆で力を合わせていい舞台を作って、日々、それぞれのポジションで自身の満足感や達成感を感じていらつしやるということですね。そうした方々が手がけられたプロの舞台を拝見した後の感動というのは、今まで仕事をしてきた電力業界、警備業界ではあまり感じられなかった部分です。興行主でありながら、舞

台を見た時には一人の観客として感動する自分がありました。

——博多座には日本中から多彩な芸能が集まっています。本当に素晴らしい劇場だと思います。

博多座なればこそというところになるのですが、演劇専用の劇場ではありますがジャンルを限ってわけではない、九州地方の皆さん方に広く芸能を堪能していただきたいと考えています。そのた



め、ミュージカルも歌舞伎もやるし芝居もやる。お客様の好みによってご来場の演目を選んでいただけるということでも、本当にいい劇場だと思います。

文化というのは都市力の中ではどちらかというと、生活に必須なインフラというよりも「魅力」として位置付けられることが多いと思います。けれど豊かな心を持たせられるということで考えると、文化を担う劇場、上演される舞台というのは、都市に必要な「インフラ」だとも考えています。それはコロナの時期に皆さん実感されたのではないのでしょうか。劇場に行きたくても行けない、やりたくても上演できないという状況を経験し、やはり生の公演に接していただく大切さを改めて感じています。

演技を披露してくださるパフォーマーの皆さん方もそうですし、劇場に足を運んで観劇していただけるお客様方もそうですが、これまで出会ったすべての方々との縁が、博多座に来ていただけたという結果に繋がっていると思っています。ですから皆さんに対しては「ありがとうございます」という感謝の気持ちを忘れず、ご恩を返すためにはいいものを育て、またこれからもいいものを揃えていかなければならないと思います。そしてその姿勢は、博多座のスタッフの皆さんにも共通して持っていていただいている基本的な部分だとも思っています。

——今後の博多座の運営についての思いをお聞か

せください。

博多座は公設民営の劇場として福岡市はじめ様々な支えの中で存在しており、私ども株式会社博多座は、劇場の運営管理者として公演を続けていかなければ会社を維持できない仕組みになっています。コロナは本当に会社にとっての危機でしたが、それらなんとか乗り越えることができました。基本的には、これまで通り皆様方がいい作品をお届けする、そのための良いラインナップが組めるようにこれからも手を尽くしていくというのが第一にあります。そしてお客様にたくさん足を運んでいただくためには、その方に合う公演の情報をタイムリーにお届けしないといけない。しっかりと私どもでも分析、研究してターゲット層的に届くように情報をお出ししていきたいと考



えています。

また、昨今の諸物価値上がりで制作費も高騰しています。けれどエンタメの場合、単純に観劇料金に上乗せしていけばいいということにはなりません。制作会社さんともウィンウィンの関係になるよう相談しながら進めていきたいと思っています。私たちも劇場としてできる効率化は色々考えていかなければなりませんし、小さなことも含めまだまだできることはあるだろうと思っています。DX(デジタル・トランスフォーメーション)の進展もありますし、そういったものを業務の中に取り込み職場環境を改善することも大切だと考えています。それがお客様に負担を転嫁しないということにも繋がっていくと思います。

また、福岡はアジアの玄関口というキャッチコピーで海外にもプロモーションしております、おかげさまで中国、韓国の個人旅行のお客様方が非常に多く、今年に入ってから欧米の観光客の方も増えてきています。商工会議所でもよく言われるのは、博多座は日本文化の発信地という役割も担っているのだから、外国のお客様を呼び込むこともこれからは考えなければいけないのではないかと思います。ただ、その観点から言うと地方劇場の特徴として毎月違ったタイプの演目を上演することはイヤホンガイド等への投資の大きな障壁になっています。けれどたとえば歌舞伎などの場合には、日本の伝統文化に興味をお持ちの外国のお客様が来場されたら観劇できるよ

うな環境を作っていくことができると考えているところです。

日本の伝統芸能を伝えること、それをさらに広げてアジアの伝統芸能を伝えるということも、博多座の果たす役割だと自認しています。アジアの芸能を紹介するシリーズとしては、日本の各地で伝承されている神楽を披露する公演をしたり、モングルの馬頭琴の演奏会などが挙げられます。来年二月にはインドネシアのバリ島の伝統楽器である、竹だけで作られたガムランジェゴグの楽団と舞踊団を招聘する予定もあります。そういった様々な企画を続けながら、広くお客様や出演者・スタッフの皆様に開けた劇場を目指すことで、博多座の役割を果たしていきたいと思っています。

取材・文／高橋涼子

■プロフィール

おおつば・きよはる

福岡県出身。熊本大学法学部卒業後一九七六年九州電力入社。秘書課長、電源立地対策部長、佐賀支店長などを歴任し、北九州エル・エヌ・ジー社長に就任。二〇一八年一〇月よりにしい顧問、専務を経て二〇一九年六月より社長を務め、二〇二四年六月に退任。同月博多座の社長に就任。

第九回脚本募集 受賞者

六月十日、東京プリンスホテルに於いて理事会終了後、第九回脚本募集の各賞を受賞されました皆様に安孫子会長より賞状と賞金が手渡され、穏やかな雰囲気の中、表彰式が行われました。

優秀作品

現代劇部門

「カッコウたちの夏―東京俘虜収容所北山分所―」

松澤 理 氏



初めて木遣りを聞いた感動を忘れません。木場の木遣り位しか知らなかった私は、山に響く木遣りを聴き、これは鳥の声だ、森への挨拶、自然への畏敬と祈りなのだと胸を打たれました。諏訪地方を舞台とした本作に木遣りを効果的に導入したいと思いました。

終戦時、国内の大小八十数か所の俘虜収容所に三万二千余の連合国軍捕虜が収容されていた事実はあまり積極的に語られてきませんでした。銃後にあつて敵国人と対峙する状況が確かにあつたのです。作品の視点は、図らずも彼らと作業することになった中学生です。

隣組、千人針、米穀通帳、慰問袋、国民服、引揚、闇市：子供の頃、親戚が集まると戦時用語が日常語として使われていました。私の両親は劇中の中学生女学生と同世代、度重なる学制変更により弄された世代です。父は長年さつまいもやかぼちやを食べませんでした、好き嫌いではなく、戦時中の記憶と直結して食べてられなかったのだと思います。母からは空襲で死屍累々の火の海を



逃げ惑った話も聞きました。もっと詳しく聞いておけばよかったと思いますが、ようやく芋かぼちやを食べられるようになった時間の癒しを、あえて反故にする勇気がありませんでした。食べ物も作中で重要な役割を担っています。

当事者から体験談を直接聞くことが困難になりつつあります。遺されたものに学び、構築し、その世界を再び生きることができなのが芝居の素晴らしさだと思います。到達には遠いですが、めざしたのはそこです。

御指導頂いた榎本滋民先生、北村文典先生、堀越真先生に心から感謝申し上げます。

このたびは第九回脚本募集現代劇部門の優秀作品に選出して頂きありがとうございます。

榎本滋民先生は脚本講座で『ある音楽を美しく響かせたい』という動機で芝居を書いても構わない、ただしそのためには綿密な構成が必要であるとおっしゃいました。

七年目毎に一度の諏訪大社御柱大祭の山出しで

佳作

ミュージカル部門

「草太郎の恋―お伽草子より―」

阿原 乃里子 氏



響きあいを目指して

シアタークリエで購入したパンフレットで今回の募集要項を目にしたとき、昔書いてそのままになっていたミュージカル台本を思い出しました。それが『草太郎の恋―御伽草子より―』の原型です。忘れていたあの言葉たちを未知の大勢に届けたい気持ちに動かされ、応募いたしました。

ただ、二幕のミュージカルを百ページという制約は厳しく、ト書きを削り台詞を削り、最後にはナンバーを削りました。(今回お読みいただく原稿は、皆さまの脳内でご自由に補完して、音楽世界を膨らませてください)

草太郎の読みは「そう」でも「くさ」でも構いません(劇中では両方使います)。御伽草子の『ものくさ太郎』を基に、日本人にとっての夢や希望やお

かしみとは何だろうと考えながら、原作の古風な言葉遊びも活かしましたし、現代風の考え方や言葉遣いも使いました。時代を超えて変わらない人の気持ちや本質が浮かび上がればと願っています。応募作品を仕上げたのち、わたしは「影絵」と出会いました。あ、今。影絵と聞いて子供だましでしょと鼻で笑いませんでしたか? その、知られざる可能性を秘めた「影絵」の世界で、わたしは小品を発表したり師匠を手伝って大勢の前で演じたりし始めました。そして、そうです。影絵と身体とミュージカルが融合したとき、たとえば草太郎たちは居合わせた方々に、どんな祈りや愛しさを響かせられるのでしょうか。世界のほうぼうで分断が囁かれる今、わたしはささやかにそんな夢を見ます。

この度はご評価いただき、ありがとうございます。より一層、励みます。



佳作

時代劇部門

「大刀洗川の水は清く」

松島 美穂子 氏



このたびは、私にとって意義深い賞をいただき、大変ありがたく思っています。

実は私は、約三十年前の第四回でも、同じ「佳作」をいただいたことがあります。

今回、入選のお知らせをいただいた際にはうれしさと同時に「もしかして自分は三十年前から進歩していないのでは…」という不安もよぎりました。

そんな気持ちを、高校生時代の友人に話すと、彼女はこう言ってくれました。

「文章を書くにも筋肉が必要。アスリートが努力して筋肉を維持するように、書く筋肉を保つことも簡単じゃない。あなたは三十年間、その筋肉を維持できたのだから、素晴らしいことなんじゃないの？」

その言葉に、私は胸のつかえが消えていくのを感じました。

思い返せば、三十年前の私は、「ものを書く」ということの辞め時を常に考えているように思います。「〇歳まで」とか「あと〇年だけ」と。

そんな中で前回の受賞があり、「これはもう、死ぬまで書くしかないんだな」と、腹をくくることができました。

その後、演劇興行協会の脚本講座にも参加させていただき、榎本滋民先生、北村文典先生、堀越真先生のご指導を受けました。

また、同じ受講者のみなさんからも、たくさんアドバイスをいただき、私にとって大変貴重な経験となりました。

励ましてくれた友人に、「授賞式であなたの言葉を拝借してしまった」と告白したところ、「光栄」と笑ってくれたことも、心に残る出来事でした。

この三十年間、数多くはありませんが、様々な作品に関わることができました。女性向けの小説ボイスドラマやゲームのシナリオなどを書いている時間はとても幸せでした。

また、小学校教師の経験がある私にとって、児童小説を発表できたことも大きな喜びです。

そんな中で知り合った方々からのアドバイスや励ましも、私を支えてくれました。

人生百年時代などと言われる昨今、そこまで大げさではないにせよ、まだ少し時間はありそうです。

身体の筋肉は衰えていくかもしれませんが、「書く筋肉」はこれからも大切に、維持していきたいと思っています。

最後に、このたびの作品を丁寧に読んでくださった審査員の皆さまに、心より感謝申し上げます。



佳作

歌舞伎部門

「お雪政八あべこべ噺」

歌舞伎部門

「女鼠捕物帳」

宮本 知佳 氏



この度は、このような素晴らしい賞を、しかも二作品で頂けました事、大変光栄でございます。ありがとうございます。

以前、演じる側の勉強をしており、映像作品、舞台作品、様々な芝居を観ていく中で、歌舞伎の魅力にとりつかれました。年間百公演、二百公演と歌舞伎を観ているうちに、「こんな話が観たいな」「私だったらこうするのに」と思う事があり、だったら自分で書いてしまおうと、最初は同人誌のような感覚で書き始めたのがきっかけです。演じる側の勉強をしていた身としては、演じたいと思うのですが、私は女ですので、残念ながら弟子入りする事は叶いません。ですが、脚本であれ

ば、私が生み出したものを歌舞伎の世界で表現することが出来ます。近い将来、私の作品が上演され、二作品、三作品と世に出て、その中から、一つでも二つでも、五十年後、百年後にも再演されるような作品を残せたらと、それを目標に頑張っています。

これからも精進してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。



第9回 令和6年(2024)

最優秀作品	部門	作者名	作品名
優秀作品	現代劇部門	松澤 理	カッコウたちの夏 ・東京府蔵収容所北山分所・
佳作	歌舞伎部門	宮本 知佳	お雪政八あべこべ噺
佳作	歌舞伎部門	宮本 知佳	女鼠捕物帳
佳作	ミュージカル部門	阿原 乃里子	草太郎の恋 ・お伽草子より・
佳作	時代劇部門	松島 美穂子	大刀洗川の水は清く



二〇二四年度 海外研修報告

三 谷 る み

二〇二四年十二月、日本演劇興行協会の海外研修でイギリス・ロンドンを訪れた。十二月三日の夜、ヒースロー空港からホテルへ向かう地下鉄の中でまず耳に付いたのは「マインド・ザ・ギャップ」と繰り返し呼びかける車内放送。

ギャップ、という日本では目には見えない違いをイメージするが、この放送は「電車とホームの隙間に気をつけて」という見たままの注意喚起である。しかし振り返ると、今回の研修はこの《ギャップ》について考えさせられる日々だった。

研修日程

二〇二四年十二月三日(火)～九日(月) ※時差により、日本帰国は十二月一〇日(火)

三日 午後 羽田空港より出国 ロンドン・ヒースロー空港着

四日 午前 レスター・スクエア周辺を散策 (TKTSで当日券購入) 午後 二公演観劇

五日 午前 大英博物館を見学 午後 引き続

き大英博物館見学、その後観劇

六日 午前 ヴィクトリア・アンド・アルバート (V & A) 博物館を見学

午後 引き続きV & A 見学後に国立劇場 (National Theatre) Guided Tour 参加、観劇

七日 午前 バービカン・センター 図書館等見学 午後 同施設内で観劇・観覧(コンサート)

八日 午前 ウェンブリー・パークへ移動 午後 園内の劇場で観劇 終演後、市内で買物など

九日 午前 ヒースロー空港より出国 翌日午前中に羽田空港着

※劇場・作品詳細は文末リスト参照

ギャップ① 大人と子ども ～「Matilda」

三日の夜に到着したため、活動は翌四日から。この日は「Matilda」(ケンブリッジ劇場)の昼公演

のチケットをあらかじめ押さえ、何か夜公演のチケットをレスター・スクエアのTKTSで購入する予定にしていた。

「Matilda」は日本でも二〇一三年に上演された。

天才的な頭脳を持ちながらも親からは半ば育児放棄されている少女・マチルダが巻き起こすユーモアと皮肉に満ちた物語だ。理解ある担任教師に才能を見出されたマチルダは学校を支配するモンスターのような校長と不思議な力で対決し、自分と大事な人たちを取り巻く環境をほんの少しだけ変える。「チャーリーとチョコレート工場」で知られるイギリスの児童文学者ロアルド・ダールの作品を原作としているが、マチルダの母の趣味をビンゴからダンスにするなど改編が加えられている。

マチルダは世界を救う旅には出ず、呪いの指輪を捨てることも、魔法学校で学ぶこともない。しかし、マチルダのささやかな冒険、「自分が自分であること」を尊重する力を手にするのは、すべての子どもにとって、あるいはかつて子どもだった大人にとっても、意味のあることだ。

水曜日だったが劇場には多くの子どもを観客がいた。その中に小学校名の入った服を着た十歳前後の一人がおり、教師に引率されていた。原作が

もともと児童文学なので不思議ではないが、日本の小学校では「観劇教室」として児童と教師のみの貸切状態にして演劇に触れさせるのが主流だ（私が指定管理者として勤務していた台東区の施設でも、区立小学校の観劇会を行っていた。劇場まで出かけず、体育館に劇団を招へいする例もある）。その割に大人になってからは観劇習慣を持たない人が多いのは、劇場で働く者としては残念なことだ。

ロビーに出ると、棚にずらりと貸出用クッションが準備されていた。これで「大人が前にいて舞台が見えない」問題はクリアできるが、気持ちの上ではどうだろう。

開演前、児童たちは明らかに興奮してはしゃぎ、教師たちが「静かに！」と繰り返していたが、芝居が始まり、子役たちが歌うオープニング曲が終わる頃には児童たちはしんととなり、はつきり舞台上に集中していた。

面白いからだ。そして、児童たちは自分と同じ舞台を面白いと感じている大人の観客たちの存在も感じている。

子どもと大人は同じではない。もちろんギャップがある。だから同じ作品を観劇するのが常に正解かはわからない。ただ、こうした体験を持った子どもたちにとっては、もう劇場は未知のものではない。成長したのち、いつかまた劇場に戻ってくるだろうと感じた。

ギャップ② 伝統 と いま

A)「変えないこと」〜「The Mousetrap」／「Waiting for Godot」

四日、TKTSでは夜の「The Mousetrap」(セント・マーティンズ劇場)のチケットを買った。この日、予定よりかなり早く目が覚めたため、店舗位置の確認もかねてTKTSのサイトをホテルの部屋で閲覧していた。サイト上(<https://official.londontheatre.com/tkts/>)と店舗での取扱座席は同一で、二十三パーセントオフだった。

朝十時半の開店早々に訪れたため、マチネー開場までもだいぶ時間があり、周辺を歩いた。いわゆる劇場街だが、少し歩くと大英博物館もある。

詳しくは後述するが、今回の研修では大英博物館とヴィクトリア・アンド・アルバート博物館を見学した。

「The Mousetrap」、邦題では「ねずみこり」とされるアガサ・クリスティー作のストレートプレイで、



いわゆる「雪山の山荘」ミステリだ。

若夫婦が運営する山荘で宿泊客の女性が殺される。事件は山荘を訪れた刑事によって予告され(捜査中の別の事件に続き、第二の殺人が起こるかもしれないというのだ)ていた。折からの大雪で、外から第三者が立ち入ることも、外に逃げることも



もできない状況での犯人捜しが始まる。

カーテンコールで「誰がそれ(殺人)をやったかは秘密にして」と観客に呼び掛ける徹底ぶりのため、これ以上の筋の解説は避けるが、本作は初演が一九五二年(二〇二二年に逝去したエリザベス二世が即位した年)、世界一としてギネスブックにも載るロングラン作品だ。したがってネタバレ禁止もある種のユーモアあふれるお約束だろう。

劇場外壁に「3rd Year」と高らかと掲げられているほか、客席をはじめ劇場内の調度品も全体に古式ゆかしい風情に満ちている。

舞台上では山荘のエントランスホールが展開されるが、劇場で販売されていたパンフレットによると、どうやら初演から大きく変わっていない舞台装置のようで、衣装も初演の一九五〇年代のモードが受け継がれているようだった。

イギリスにはもちろんcostume play、「時代劇」の伝統があるが、本作はそこまで古い時代設定ではない。「変えない」ことによる「ギャップ」は問題にならないのかとも思ったが、長く上演が続けられていることが、現代の観客にも愛されていることを示しているのだろう。

翌日の五日夜に観劇した「Waiting for Godot」(シアター・ロイヤル・ハイマーケット)も「変えない」ことへの意思を感じる上演だった。

作者サミュエル・ベケット自身による改訂以外のテキスト改編は禁じられているため当然と言えば当然だが、セットや衣装も含め、私が過去に日

本で観た上演とも、言語の差はあれ同じである。

しいて言えば、初演時には共に白人俳優によって演じられた二人の主役のうちエストラゴン(ブーツが脱げなくなる方)をタンザニア人の両親を持つルシアン・ムサマティが演じていたのが、二十一世紀らしきなのかもしれない(この、多様な人種による上演については後程また触れたい)。

一方で、一晚にして世界がぐるりと反転するようにラッキイとポッツォの関係性が変わる様子は、各地で紛争や軍事衝突の続く二〇二四年にこそ生々しく胸に迫った。不安定で居心地の悪い状態が現実にはフィットするというのは皮肉なことだが、エストラゴンとウラジミル(奇しくもプーチン大統領と同じ名)が待っているゴドー(God 神であるという解釈が一般的だ)は最後まであらわれないものの、これからも来ないかはわからない、と

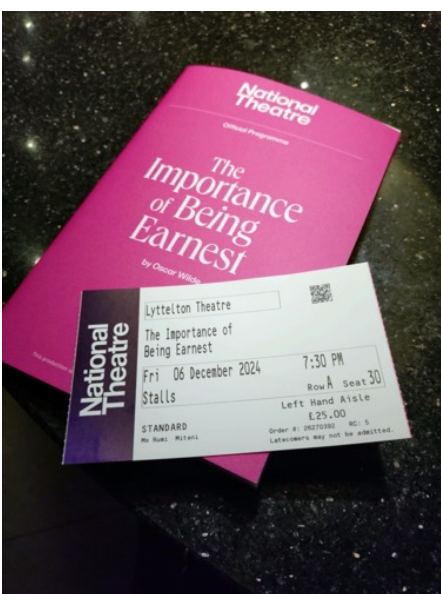


ぼんやり着地する幕切れが改めてハッピーエンドのように感じ、一七二〇年に開場したという歴史ある劇場の建物を出た。

余談だが、通りを挟んで反対側にある劇場は His Majesty's Theatre だった。長らく Her Majesty's Theatre と呼ばれてきた劇場だが、チャールズ三世国王就任に伴って改称されたものだ。調べるとこちらもアン女王時代から三百年以上の歴史があり、王が変わるたびに「Her」と「His」を入れ替えてきたそうだ。

B)「変えてゆくこと」→「The Importance of Being Earnest」 / 「The Midsummer Night's Dream」

六日、午前中にヴィクトリア・アンド・アルバート博物館を見学した後、ナショナル・シアター(国立劇場)へ向かった。地下鉄のエンバンクメント



駅(堤防という意味)を出て、川を越える橋を渡って南岸のサウスバンク地区へ入る。長く隅田川の近くで働いてきたので、個人的には川には親近感がある。まだ昼間なので風もさほど冷たくなかった。近くにギャラリーなどを擁するサウス・バンク・センターという複合文化施設があるが、その前日までに歩いた、いわゆるウエストエンドの劇場街の外のエリアになる。

ここで観劇した「The Importance Of Being Earnest」は一八九五年初演の作品で(泉鏡花の「瀧の白糸」が書かれた頃だ)、いわゆるヴィクトリア朝文学に分類される。同じオスカー・ワイルド作品でも「ドリアン・グレイの肖像」や「サロメ」、「幸福の王子」と比べると日本では知名度が低いが、ミュージカル版「アーネスト・イン・ラブ」を宝塚歌劇団が上演しているそうだ(私は未見)。

都会と田舎で二重生活を送る貴族階級の青年ジャックが、偽名「アーネスト」を名乗っている時に知り合った友人アルジャーノンに従妹グウェンドレンに恋をしたことから始まるコメディだ。ジャックが正直に偽名を告白して求婚しようとした矢先、グウェンドレンから「子どもの頃からアーネストという名前に惹かれていたので、あなたと出会えて運命だと思った」と打ち明けられ、嘘を嘘と言えなくなってしまう。一方のアルジャーノンは、ジャックの田舎の家で出会ったセシリーに一目ぼれし、自分はジャックの弟のアーネストだと嘘の自己紹介をしてしまう。

Earnest(アーネスト)は英語圏では一般的な男性名だが、「正直、まじめ」という意味である。《「正直」という嘘の名前を名乗っている》のがおかしいのだが、日本語訳で「まじめが肝心」と題されると、原題の持つダブルミーニングの妙が消えてしまうのは惜しい。

今回の上演ではオリジナル台本の第一場の前にプロローグが追加されており、鮮やかなピンクのドレス姿でグランドピアノを弾く男性(アルジャーノン役のチュティ・ガトウ)を中心として、男女が踊る迫力ある場面になっていた。何人かの男性は女性の、女性は男性の服を身に着けており、ワイルド自身のセクシュアリティ(彼が男性との恋愛を理由に投獄されたことは現代のイギリスでは黒歴史だろう)を踏まえた上での新演出であることがパンフレットなどから察せられる。

本編で描かれる恋愛はヘテロセクシュアルなものだが、衣装は男女ともかなり派手な、原色や花柄を多用した衣装が着用されており、現代に合わせて「変えた」部分なのだろう。

しかし、個人的にはアルジャーノン、グウェンドレン、グウェンドレンの母ブラックウェル夫人の三役が黒人の俳優によって演じられていたことの方が意外だった。そして意外に感じることで自体が差別的かと自省したが、権威主義的で血統を重んじるためにジャック(貴族の養子となり土地を相続した元捨て子)の求婚をはねつけようとするブラックウェル夫人を白人女優が演じた場合、観

客からの見え方はまた違ってくるだろうとも感じた。なお、ブラックウェル夫人の衣装にはアフリカの民族衣装風の華やかな帽子などもあったが、演じたシャロン・D・クラークはロンドン生まれで、ローレンス・オリヴィエ賞を三度受賞している。

国立劇場なので配役時に人種バランスを考慮している可能性もあるが、町中を歩いたり、地下鉄に乗ったりしているとロンドンには多様な人種・民族が暮らしていることを実感する。今のロンドンでは、白人しかない舞台空間の方が現実との「ギャップ」があるのだ。

開演前、サウス・バンク・センターの金・土・日のみ開かれるフードマーケットで腹ごしらえしたが、出店しているフードカーのほとんどが、日本食も含めイギリスの料理ではないものだった(私は、ヤギの乳のチーズを使ったレバノン料理を食べた)。



多民族キャストによる上演は、翌日七日の「Midsummer Night's Dream」(バービカン劇場でも同じで、妖精たちも、結婚式の出し物の芝居の稽古に励む職人たちも、様々な肌色、髪色の人たちによる構成となっていた。原作の設定を遵守するなら(人間は)全員ギリシヤ人(アマゾンの女王・ヒポリテはトルコ人かもしれない)なので、シェイクスピアによる書き下ろし初演時にイギリス人俳優が演じた方がむしろ「正しくなかった」のかもしれないが……。

今回の上演では、クリエイティブチームにイリユージョン・デザイナーが加わり、丸い提灯状のランタン(素材が紙かは未確認)とライティングで幻想的なアセンズの森を作り上げていた。

一方で、衣装はパンクファッションなど一九七〇年代のロンドンのスタイルだったが違和感はなく、清楚で一見おとなしうだが意志の強いヒロイン・ハーミアにも合っていた。

ただ、私は長年この作品は妖精パックを主役とする芝居だと認識していたので、織工ボトム役のマシュー・ベイントン(子ども向け番組で人気を博し、コメディアン・劇作家としても活躍している)が主演としてクレジットされているのは少し意外だった。

もう一つ意外だったのは、この夏至前夜の騒動を描いた喜劇が少しも季節外れに感じなかったことだ。festive seasonと呼ばれるクリスマスから新年にかけての時期、明るくにぎやかで、活気に



満ちた街にぴたりと合うものに仕上がっていて、古典と現代とのギャップを埋め、さらに季節のギャップをも一夜の魔法のように埋めてしまったのだった。

ギャップ③普段の日 と 特別な日

A) 博物館と演劇

今回の研修では、大英博物館とヴィクトリア・アンド・アルバート博物館(以下V&A)を見学したことを前述した(当初旅程計画に入れていたナショナル・ギャラリーには行けなかった)が、この二館は多くのロンドン市内の博物館・美術館と同様、特別展以外は入館無料である。その中でも、六日の午前中に訪れたV&Aには「Theatre & Performance」という一角があり、ロンドンへ行く演劇関係者には必ず見学して欲しいほどだった。これは二〇世紀初頭に劇作家・女優として活動

していたガブリエル・エントヴェン氏が個人的な演劇資料コレクションを一九二五年に寄贈したことから始まったもので、ちょうど今年は一〇〇年目に当たる。氏の没後も収集は拡大しており、現在も上演されている作品の舞台衣装や舞台装置模型の展示のほか、来館者がスタッフ体験できる(映像に合わせて効果音を鳴らす、照明を照らすなど)コーナーもある。

コレクション自体の価値はもちろんだが、個人的には、これが演劇の専門博物館ではなく広範囲の収集物を誇るV&Aの中にあることに意義があると感じた。絵画、彫刻、写真、宝石などの他の展示品が目的で来館した人たちがついでに演劇に触れられるのだ。直接的な劇場への来訪を促すだけでなく、演劇の分野で働く人の裾野を広げる上でもプラスになるのではないだろうか。



B) Theatre For Everyone と公共劇場の役割

先述の「The Importance Of Being Earnest」は、当初から劇場で当日券を購入する計画だったが、出発前週に劇場のサイトを確認したところ六日のチケットは完売していたため、「フライデー・ラッシュ」に挑戦した(<https://www.nationaltheatre.org.uk/fridayrush/>)。

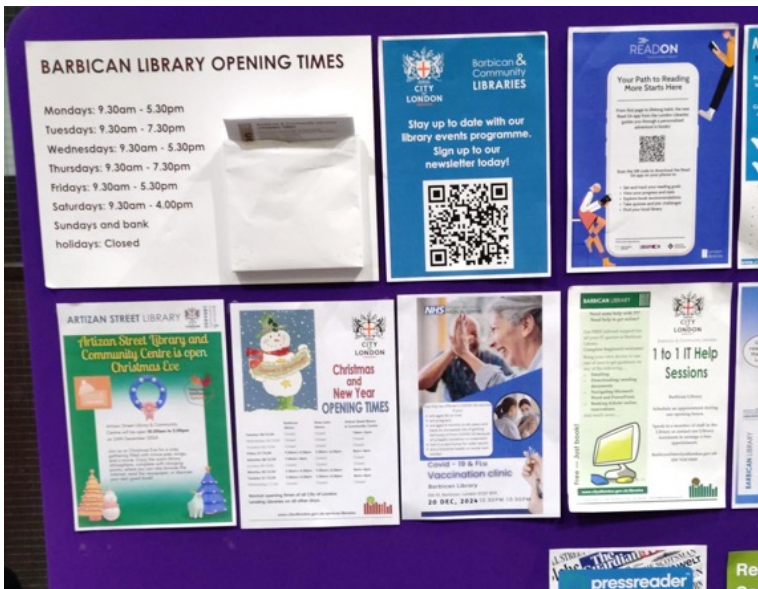
毎週金曜の午後一時から、劇場公式サイトで翌週のチケットを低価格で先着再販するというものだ。しかし回線が繋がった時点で二六三〇人待ち、約一時間後もまだ二二九八人待ちだったためあつさり断念してしまった(自分の順番が来ると十分だけ購入手続きの時間が与えられ、時間が過ぎると次の待機者に権利が移る)。

これは「安く演劇を楽しむ」方策として周知されており、TKTSと同様、気軽に劇場を訪れる習慣作りに一役買っているようだった。なにしろ、立見券十ポンドはランチ一食分より安い。

この日は結局チケットの当てのないまま国立劇場に出かけ、まず十七時からGuided Tourに参加した。いわゆるバックステージツアーで、開場前、俳優たちが舞台上でストレッチしているのを客席から見るところから始まり、舞台裏を回る。工場見学のようにコースが作られており、大道具・小道具や衣装の作業場を上から見下ろせる。

コースは劇場本体と分断されているわけではなく、見学中でも、開演準備中のスタッフがあわただしげに私たちの後ろを通って行った。

これは、Theatre For Everyoneという劇場のモットーに沿った事業で、ガイドのアンドリュー・キャンディッシュ氏によると、現在の建物になった一九七六年頃から継続して行われているそうだ。私たちが参加したのは日に二回実施される一般向けのツアー(十八ポンド)で、参加者は大人ばかりだったが、十歳以下、十二歳〜十四歳の子どもの向けの学校ツアーも申し込みに応じて行っている。そのほかにもより実践的な技術ワークショップや、劇場所蔵の演劇資料を公開する定期イベントが開催されている。



なお、Guided Tour前にチケット売場に行き、「一時間前から当日券を販売するとHPで見たが……」と尋ねたところ、男性スタッフは「一時間後に来てもチケットがあるかはわからない」とやや塩対応だった。しかし、ツアーから戻ると同じスタッフがすごい勢いで私を手招きし、「二十五ポンドのチケットがある！」と教えてくれた。最前列のため少し狭いので安いという席だったが私には十分で、迫力ある舞台を楽しむことができた。

今回訪問したもうひとつの公共劇場は、ロンドン市が運営するバービカン・センター内のバービカン劇場だ。国立劇場にも劇場以外に映画館があるが、ここには映画館、音楽ホール、美術館、図書館があり、複合的な文化体験ができる(私も音楽ホールで「A Gospel Christmas」というコンサートを鑑賞した。Gospelというタイトルだがポップス曲もあり、幅広い年代の観客がいた)。各施設の入場券が割安になる会員制度があり、特に二十五歳以下は五ポンドから舞台公演が見られる(定価の五分の一)。

これらの他施設の中でも、特に図書館は皆が日常的に訪れる場所だという印象を受けた。一度に十二冊の本を三週間無料で借りられ、DVDは有料、また予約サービスは別料金がかかるようだ。

こうした公共の複合文化施設は日本でも珍しくはない(渋谷区文化総合センター大和田など)。しかし多くの場合、ホールの稼働は月間数日のみというのが実情ではないだろうか。

私は二〇二一年から約三年、明治座が指定管理者を務める台東区立浅草公会堂で勤務していた。「新春浅草歌舞伎」で知られる浅草公会堂は、ホールの稼働率こそ他の区施設よりも充実しているが、実際に台東区に居住していても「お祭りのときに化粧室を借りたことがある」程度の利用経験の区民が多い。バービカン・センターのように図書館など日常的に通う施設があり、同時にほぼ毎日何かの公演をやっているホール／劇場が同じ建物内に所在する環境であれば、日常生活の延長からさらなる文化体験につなげていけるのではないか。館内では催事カレンダーが無料配布され、映画



館（バービカン・シネマ）の二月の特集上映で、日本のアニメ映画「この世界の片隅で」が上映されると案内されていた。国立劇場が事実上の無期限休館に陥りつつある日本で、演劇の世界の片隅について考えさせられることは多い。

（C）あらためて、非日常の世界へ「Starlight Express」

研修最終日は午前中から空港に向かうため、実際の観劇は八日が最後だった。この日は日曜で休みの劇場もあるが、長期の天気予報が晴れだったので、少し遠出をしてウェンブリーに行く予定にしていた。ロンドンの中心地区からは地下鉄で一時間以上かかるが、ここにはサッカー英国代表の本拠地であるスタジアムがあり、九万人が収容できるアリーナもある。

もともと、私の目当てはスタジアムでもアリーナでもなく、トゥルバドル・ウェンブリー・パーク劇場とそこで上演される「Starlight Express」だ。「Starlight Express」は数多くの名作を生み出してきたアンドリュー・ロイド・ウェバーのミュージカル（一九八四年初演）だが、日本では一九九〇年を最後に上演されていない。

トゥルバドル・ウェンブリー・パーク劇場の内装は、それまでにロンドンで行ったどの劇場とも似ていなかった。外からの印象通りの倉庫風の高い天井に蛍光色の派手な照明が光っている。まるで異空間だ。



オリジナルグッズやCD、飲み物などを売るブースが展開される中、「顔はめ」で楽しく写真を撮る子ども連れのグループが多かった。

開場すると、円形舞台を囲む形で客席が並んでおり、誘導スタッフ（他の劇場では各フロア二人ほどだったが、ここでは人数が多い）は工事用の誘導灯を手に入れている。

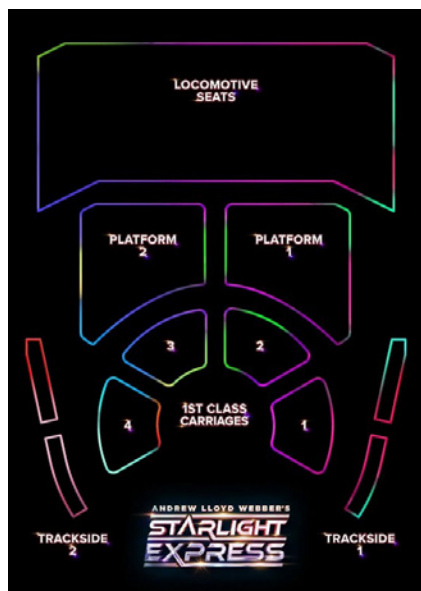
客席を見ると、なんだかすごいところへ来たなと思わずにはいられなかった。テレビでしか見たことはないが、スピードスケートの試合会場を連想するつくりだ。私は前方の「1st Class Carriages」の「2」エリアの席を購入していた。ここは非常時をのぞき開演中の出入りはできないと

誘導スタッフに説明され、化粧室の利用や物販は早めに済ませておくよう言われる。

なぜ出入りできないかは、開演するとすぐにわかる。座席表の各ブロック間の通路は俳優たちの演技エリアとなっている。それだけならさほど珍しくないが、俳優たちは全員ローラースケートを履いており、猛スピードで駆け抜けてゆくのだ。

舞台は、一人の子どもが母に促されてベッドに入る所から始まる。子ども(役名はコントロール、初演時は少年に限定されていたようだが、現在は少女の役もキャスティングされている)は鉄道好きで、夢の中では鉄道のおもちゃたちが人の形をとり、夜な夜な最速を競うレースをしている。

おもちゃには「エンジン」たち、「客車」たち、「貨車」たちとグループ分けがあり、なかなか専門的だ。自分に自信のない蒸気エンジン(steam engine)のラストイ(青年として演じられる)が仲間と切磋琢磨していく中で成長していくのがメイ



ンストーリーで、客車(coach)のパール(若い女性として演じられる)とのほのかな恋も描かれる。レースはエンジンたちが客車もしくは貨車とペアになる形で行われ、常に全力疾走である。私は鉄道に関する知識がなく、セリフ中の専門的な単語もほとんどわからなかったが、特に問題にならないほどの迫力だ。そして、作品の主たるメッセージは鉄道の性能云々ではなく、はるかに普遍的なものだった。

作中の世界では蒸気エンジンは既に旧式で、ラストイはディーゼルエンジンのグリースボール、電気エンジンのエレクトラに常に圧倒されている。また貨車たちよりも早く走れない客車たちはスピード至上主義的な価値観の中で居心地悪く過している。そんな中でも、食堂車のダイナ客車たちは高らかに「I am me, and that's all I need(私は私、それが私に必要なすべて)」と歌い上げる(「I am Me」)。そこに込められた必死の自己肯定は、大人たちにこそむしろ刺さるものではないか。そしてくじけそうだったラストイは先輩の蒸気エンジンに励まされ、水素燃料で動く貨車・ハイドラと組んでレースで勝利を手にする。なお、このハイドラは今回の上演(二〇二四年六月)に合わせて追加された新キャラクターで、現実の水素エネルギー活用を反映した台本改訂だと知って驚いた。

コントロールに自己投影して舞台の非日常感にはしやぐ子どもたちの中には、ラストイの、ある

いはダイナの迷いや痛みがまだわからない子もいるかもしれない。しかしいつか、現実の世界で人生経験を重ねた上で、かつて見た夢のような舞台を思い出す日が来るのではないか。

そして、この自己尊重感とは図らずもロンドンで最初に見た「Matilda」と共通するものだった。

劇場の建物について追記すると、元はテレビ用スタジオだったのを改築したもので、さらにこの公演のために八週間かけてローラースケート用コースのある客席を作り上げたことが公式パンフレットに紹介されていた。ひとつの演目に対してかなりの労力と費用をかけた取り組みであり、ロンドン公演を前提としているからこそできることなのだろう。

結び 《ギャップ》と共にあること

帰国し、私は劇場での勤務に戻ったが、ギャップは日本でももちろんある。興行側と観客の間にもあるし、一つの会社の中にもある。

ギャップがあれば克服したい、越えたいと感じることも少なくないが、演劇という明確な正解を持たないものに関わっていく上では、問題を単純化しすぎると却って遠回りかもしれない。誰に、何を届けたいのか。まずは多くのギャップを意識することから始めようと思う。

◆観劇・観覧作品一覧

十二月四日 十四時開演 「Matilda」マチルダ

@Cambridge Theatre ケンブリッジ劇場

原作 Roald Dahl／作曲・作詞 Tim Minchin

／脚本 Dennis Kelly／演出 Matthew Warchus

一九時三〇分開演 「The Mousetrap」おととろ

@St. Martin's Theatre セント・マーティンズ劇場

作 Agatha Christie／演出 Philip Franks

十二月五日 十九時三〇分開演 「Waiting for

Godot」ゴドーを待ちながら

@ Theatre Royal Haymarket シアター・ロイ

ヤル・ハイマーケット

作 Samuel Beckett／演出 James Macdonald

十二月六日 十七時開始 「Guided Tour」劇場ガ

イドツアー

@National Theatre イギリス国立劇場

一九時三〇分開演 「The Importance of Being

Earnest」おごめが肝心

@National Theatre イギリス国立劇場

作 Oscar Wilde／演出 Max Webster

十二月七日 十三時開演 「Midsummer Night's

Dream」真夏の夜の夢

@Barbican Theatre バービカン劇場

作 William Shakespeare／演出 Eleanor Rhode

十九時三〇分開演 「Gospel Christmas」ゴスペル・クリスマス

@ Barbican Hall バービカン・ホール

十二月八日 十三時開演 「Starlight Express」ス

ターライト・エクスプレス

@ Troubadour Wembley Park Theatre トウル

バドール・ウェンブリー・パーク劇場

作曲 Andrew Lloyd Webber／作詞 Richard

Stilgoe／脚本 Arlene Philips／演出 Luke

Shepard

■二〇二四年度 海外研修参加者名

氏 名
衛 藤 蘭
金 井 真 由
久 保 田 毬 子
佐 川 芽 生
城 戸 芳
鈴 木 里 咲
野 口 康 太 郎
古 川 綾 子
三 谷 る み
吉 森 久 美

加盟劇場

歌舞伎座	松竹株式会社	東京都中央区銀座四―一二―一五
サンシャイン劇場	松竹株式会社	〇三―三五四五―六八〇〇
新橋演舞場	東京都豊島区東池袋三―一四 文化会館	〇三―三九八七―五二八一
シアタークリエ	松竹株式会社	〇三―三五四一―二六〇〇
明治座	東宝株式会社	〇三―三五九一―二四〇〇
御園座	株式会社明治座	〇三―三六六〇―三九三九
新歌舞伎座	株式会社御園座	〇五―二二二二―八二〇一
大阪松竹座	愛知県名古屋市中区栄一―六一―四	〇六―七七三〇―二二二二
南座	株式会社新歌舞伎座	〇六―六二二四―二二二二
博多座	松竹株式会社	〇七―五五一―一一五五
	京都府京都市東山区四條大橋東詰	〇九―二二六三―五八五八
	福岡県福岡市博多区下川端町二―一	

編集後記

今年も早、残りを数えるばかりとなりました。齢を重ねる毎に一年が早く過ぎ去る感じるようになりました。振り返れば今年は何があったのか、春、前評判があまり芳しくなかった関西万博開幕。終わってみれば全てよし。小生も憚りながら一回行きました。

夏、もう異常ではない異常気象。酷暑で体が悲鳴を上げまくり。

秋、憲政史上初の女性総理誕生。更なる女性の活躍に期待が寄せられます。

冬、はてさて何が起こるか、もうすでに起きているか、楽しみです。

二〇二六年丙午、情熱や強さを象徴する特別な干支と言われています。

来るべき年も皆様にとって良き年となりますことを祈念しております。(Y)

取材・文 高橋 涼子(理事インタビュー)

写真 阿多 亨(理事インタビュー、脚本募集受賞者)

印刷 株式会社 宝円堂

編集・発行 公益社団法人 日本演劇興行協会

発行所 東京都中央区銀座一丁目二七―八 セントラルビル

発行日 二〇二五年十二月

不正転売禁止法

2019
6.14
施行

演劇、コンサートやスポーツなどのチケット（特定興行入場券）の不正転売、または不正転売を目的としてチケットを譲り受けた場合、**1年以下の懲役、100万円以下の罰金**、またはその両方が科せられます。



*Japan
Association
of Major
Theaters*